

仏教文学研究の諸問題

——研究の動向と課題を中心に——

石 橋 義 秀

はじめに

編集部より「国文学の分野において、日本仏教研究はどのように位置づけられているか、或いはどのような意味で日本仏教を研究する必要があるか」という点を考慮して研究の動向をまとめるように依頼された。しかしながら、国文学の分野の場合、国史学等の分野とは事情が異なる。即ち、当分野においては、日本仏教そのものを研究対象にすることは全くといってよい程、行われていないし、また、日本仏教研究に対してもあまり目が向けられていないというのが実状である。

但し、国文学を研究する場合、日本仏教に無関心でおられるはずはない。周知の通り、仏教（仏教思想）が日本の文学に深く浸透し、古代から近代・現代に至る諸々の文学作品に少なからぬ影響を与えてきたことは否定できない事実である。（因みに、仏教は、文学のみならず、日本の文化全般に大きな影響を及ぼし、日本独自の仏教受容の様相が展開するのである。）

つまり、仏教の影響を受けた文学作品を一般に「仏教文学」と称しているが、国文学の分野においては、仏教文学に対する研究が近年非常に盛んに行われている。そのような状況を考えて、小稿のテーマを「仏教文学研究

の諸問題——研究の動向と課題を中心に——とした。本誌の特集テーマ「日本仏教研究の諸領域」にそぐわないと受けとられるかもしれないが、仏教文学は、仏教が日本の文学の中で展開した一つの姿と考えられるし、またそれは日本仏教のデフォルメされた一つの姿と見ることもできる。従って、仏教文学の研究動向および展望をまとめることは、本誌の特集テーマの趣旨に合致するものと考ええる。

なお、中世文学会の依頼により「仏教文学研究の動向——昭和三十年以降、現在まで——」と題する原稿を昨年十二月にまとめ、提出した。近日中（本年秋季）に中世文学会三十周年記念冊子『中世文学研究の軌跡と展望』が出版されるが、そこに掲載される拙稿は、中世の文学（仏教文学）に限定して考察したものである。今回、中世に限定しないで、新資料等を加え、大幅に書き改めたが、前稿と若干重なる部分がある。あらかじめお断りしておきたい。

一、大正末期～昭和初期の研究状況

仏教文学の名称は明治後期に用いられている（織田得

能編『国文中の仏教文学』明32・3 国語伝習所）が、本格的に仏教文学の研究が行われるのは、大正末期以降のことである。先ず坂井衡平は国文学を四大系統に分け、その一つを仏教文学系統とし、さらにそれを法語類や仏教説話類等の四系に分類している（『今昔物語集の新研究』大12・3 誠之堂書店）。その後、昭和初期に筑士鈴寛（仏教文学研究——特に法儀の文学について——）昭6・9 岩波講座日本文学）、豊田八十代（『国文学に現れたる仏教思想の研究』昭7・5 大岡山書店）、坂口玄章（『日本仏教文学序説』昭10・9 啓文社）、福井久蔵（『国文学と仏教』昭14・9 三省堂）などの研究——主として国文学の中の仏教についての研究——が続出する。以上の国文学者の仏教文学研究に対して、ほぼ同じ時期に仏教学者の小野玄妙（『仏教文学概論』大14・9 甲子社）、深浦正文（『仏教文学物語』昭4・10 東森書房）、山辺習学（『仏教文学』昭7・3 大東出版社）らの研究も見られるが、いずれも經典を仏教文学と考え、それを研究対象とし、經典の紹介や解説が中心であり、文献学的研究に重点が置かれ、国文学を直接の研究対象とするものではない。その後、仏教学者の研究は影をひ

その「後述の岩本裕・古田紹欽・石田瑞磨がその系統の研究を継承するにすぎない」、仏教文学研究は国文学系統の学者に占有されてしまう。

つまり、大正末期から昭和初期にかけて、国文学者・仏教学者の間で別々の角度から研究がなされたが、後の仏教文学研究に大きな影響を与えるのは、国文学者——特に筑土鈴寛——である。その研究は『筑土鈴寛著作集』（全五巻 昭51・4・52・11 せりか書房）として集大成されている。

* * *

さて、仏教文学研究が大きく進展するのは、昭和三十年代以降のことである。その後、現在に至るまでのおよそ三十年間の研究動向とそれに関する諸問題を十年ごとに区切って論述したい。

二、昭和三十年年代の研究

昭和三十年年代における仏教文学研究を見渡し、その全般にかかわる本格的な研究として第一に取りあげるべきは、永井義憲著『日本仏教文学研究』（昭32・3 古典文庫）

および『日本仏教文学』（昭38・10 塙書房）であろう。

前者は第一編仏教文学史の方法と対象、第二編唱導文学史稿、第三編説話文学と唱導、第四編日本文学と仏教、より成る（巻末に「日本仏教文学関係論文目録抄」を付載する）。第二・四編の研究（中国・日本の唱導についての概説、仏教文学関係の論文23編）も貴重であるが、第一編の論考——仏教文学研究の意義と方法・研究史・研究対象について——は、前記・筑土鈴寛の研究を継承しつつ、仏教文学研究を体系的にまとめようとする画期的な業績といえよう。

後著は、前著の第一・二編（付編・目録）を全面的に改稿したものであるが、特に前編日本仏教文学——意義・方法・対象——において、執筆時までの仏教文学研究の動向を整理し、後の研究の課題を示すなど、研究者の指針となるものである。「その他、仏教文学を標榜した研究ではないが見のがすことができないのは、小林智昭著『中世文学の思想』（昭39・5 至文堂）である。本書は、中世文学の底辺にみとめられる仏教が作品の内在的契機としてどのように結実したかを研究したもので、序説において、「中世の文学精神」「浄土思想の中世的展開」「無常思想の問題」を論じ、以下、平家物語・

徒然草などを取りあげ、その思想と人間観の特色を追求する。氏には『無常感の文学』（昭34・10 弘文堂）があり、万葉集から芭蕉に至るまでの無常感を概観する。」

法語・説話などの個別研究については後述するが、この年代において注目すべきは仏教文学研究会の活動である。即ち昭和三十七年四月に「仏教文学・芸能、および一般文学・芸能の中に現われた仏教の研究を目的とする」仏教文学研究会が結成され、翌年（昭38・1）論文集『仏教文学研究』（第一集）が刊行された。仏教文学関係論文十編（執筆者、山岸徳平・五来重・大久保良順・岡崎知子・高橋貞一・外村久江・榎克朗・菊地良一・福永静哉・宮崎円達）を収録する。その内容は「文学・仏教・中世をめぐる問題」「法語文芸」の他、釈教歌・平家物語・宴曲・親鸞伝絵等、種々のテーマについて論じられている。第二集は三十九年二月に刊行されたが、論文十編（執筆者、小川貫式・永井義憲・新間進一・峯村文人・榊泰純・権藤円立・門前真一・山本唯一・佐々木倫生・高橋貞一）を収録する。その後、昭和五十一年までに論文集が十四冊（第一期十二冊・第二期二冊）出版され、五十二年からは雑誌

「仏教文学」にきりかえられた（学会名も五十三年から仏教文学会に改称された）。それら論文集・雑誌に約二百三十編の仏教文学関係の論文や資料が収録されており、仏教文学研究の進展に大きな役割を果している。

個別研究（①法語） 法語そのものの研究書ではないが、西尾実著『中世的なものとその展開』（昭36・12 岩波書店）の第一部「中世文芸の展開」で、正法眼蔵および随聞記と歎異抄に「中世文芸史の展開に欠くことのできない位置と意義」（一八八頁）を認め、第二部で、道元の「典座教訓」・「愛語」等について論じ、道元の法語は「自己探究の深さときびしさにおいて卓越している」（四〇〇頁）と結論づけている。

この年代の終り（昭39・4）に日本古典文学大系第二期の刊行が始まるが、第一回配本が『親鸞集・日蓮集』である。同年八月に『仮名法語集』、翌年十二月に『正法眼蔵 正法眼蔵随聞記』が刊行されるが、法語関係作品が三冊を占める（法語以外にも『梁塵秘抄』『五山文学集』『沙石集』『愚管抄』（昭40・1・42・1）など、仏教文学乃至仏教的色彩の濃い作品が収められ、第二期の中世関係十冊のうち半

数以上を占める」。いうまでもないが法語関係三冊には、いずれもきめのこまかい頭注・補注、詳細な解説がつけられ、文学的にも教学的にも信頼度の高いものである。その後の法語研究に与えた影響は非常に大きいといえよう。

②説話 この年代における説話研究は、前年代に較べ、非常に活発な展開を示す。特に注目すべきは益田勝実著『説話文学と絵巻』(昭35・2 三一書房)と西尾光一著『中世説話文学論』(昭38・3 塙書房)である。前者は古代説話、後者は中世説話に重心が置かれるが、ともに説話文学と本格的に取り組み、説話文学の本質・特質を追求し、後の説話研究に大きな影響を与える。

その他、取りあげるべきものとして、山田孝雄他校注『今昔物語集』(全五冊、昭34・3・38・3 岩波書店)と国東文麿著『今昔物語集成立考』(昭37・5 早稲田大学出版部)である。前者は今昔物語集全巻の厳密な校訂、詳細な注釈を施した本格的なテキスト(注釈書)であり、今昔物語集研究の進展に大きな役割を果たす。後者は今昔物語集の構成・組織について詳細に論究し、その実態を明らかにした労作である。

した仏教文学研究会の果たした役割の大きいことは前述の通りであるが、その会員以外にも仏教文学研究を志す者が少なくなく、この年代において仏教文学研究は一般化し、市民権を得たと考えられる。

まず、仏教文学を標榜した単行本のうち、注意すべきものを取りあげる。(1)永井義憲著『日本仏教文学研究・第二集』(昭42・4 豊島書房)は、前著『日本仏教文学研究』以後の論文二十六編を「仏教文学史の諸問題」「女流文学と仏教」「説話・歌謡と仏教」の三編に構成したもので、いずれの論も示唆に富む実証的な研究である。

(2)間中富士子著『国文学に摂取された仏教——上代・中古篇』(昭47・12 文一出版)は、国文学史の線に沿って奈良・平安時代の国文学に摂取された仏教思想を系統的に概説する。(3)仏教学者、古田紹欽著『仏教と文学』(昭48・3 創文社)は、既発表論文二十編をまとめたものであるが、親鸞・道元の法語類や、一休・沢庵の作品などについて、仏教学の立場から論究し、日本文学と仏教との関わりを見きわめようとする。(4)武石彰夫著『仏教文学論考』(昭49・5 白帝社)は、仏教歌謡・法語・説話など、

インド学・仏教学の立場からの研究として注意すべきは、岩本裕著『インドの説話』(昭38・9 紀伊国屋書店)、『仏教説話』(昭39・2 筑摩書房)である。前者は日本の文学とインドの説話を中心にし、仏教を通して日本に移植されたインド文化の流れを論じ、後者は仏教説話の展開の諸相を比較文学的な立場から論述している。「両書の中核に、その後の研究を加えて『仏教説話の源流と展開』(『仏教説話研究』第二巻 昭53・6 開明書院)にまとめられた。」

その他、関山和夫著『説教と話芸』(昭39・2 青蛙房)、金田一春彦著『四座講式の研究』(昭39・3 三省堂)など、取りあげるべき研究もあるが、紙数の関係で省略する。

三、昭和四十年代の研究

昭和四十年代に入ると、仏教文学研究は一段と進展し、多様化する。即ち、仏教文学関係の論文は三十年代に比べて急激に増加し、仏教文学を標榜した単行本も『仏教文学研究』十一冊(第三集・第十二集、第二期第一集)の他、約十冊出版されている。年二冊『仏教文学研究』を公刊

仏教文学に関する既発表論文をまとめたもので、実証的な研究といえよう。(5)書名に仏教文学を掲げないが、小林智昭著『続中世文学の思想』(昭49・12 笠間書院)は、前著『中世文学の思想』以後、約十年間に発表された論文二十六編を氏の没後にまとめられたものである。第一部は仏教思想を軸にして方丈記・徒然草・平家物語等を論じたもので、第二部は「仏教文学の諸問題」「法語文学」「仏教と文学」の三章より成るが、いずれも精細な深い造詣を示す論考である。

個別研究 ①法語 先ず、西尾実著『道元と世阿弥』(昭40・11 岩波書店)は、前著『中世的なものとその展開』の後、道元および世阿弥の著述を通して中世文学の特質を明らかにしたものである。「特に第一部に『中世文学と道元に関する覚書』『正法眼蔵の中世文学における位置と意義』など、道元に関する論文九編が収められている。」この他、道元関係の研究として寺田透著『道元の言語宇宙』(昭49・6 岩波書店)がある。正法眼蔵に関する論文十一編と講演速記三編を収録するが、著者の透徹した眼で道元の思维構造を説く。

菊地良一著『中世の唱導文芸』(昭43・4 塙書房)は、中世における唱導の説話と教説を中心に、それがどのような文学的営みをもつたについて研究したものであるが、その後半部で法語を取りあげている。即ち第四篇「法語文芸について」で、法語文芸の特質を明らかにし、以下、平安時代中期以降、鎌倉時代の法語(特に親鸞・日蓮・道元の法語)について論じ、第五篇「道元の法語」で、正法眼蔵・同随聞記について詳細に論じている。

その他、安良岡康作著『中世の文学の探求』(昭45・10 有精堂)の第二部に「道元と兼好」「正法眼蔵道得」の構造」「歎異抄」における親鸞語録について」など法語関係の論考がみられる。また、前記の小林智昭『続中世文学の思想』の第二部・第二章法語文学に「法語の構造」「日蓮の法語」「日蓮の文学」など五編の論文、第三章仏教と文学に「正法眼蔵随聞記抄説」が収められ、日蓮や道元の法語について詳しく論じられている。

最後に、日本思想大系『道元』(上・下 昭45・5、47・2 岩波書店)に正法眼蔵全巻が収められ、詳細な注解・解説がつけられている。[同思想大系には『日蓮』(昭45・12)、

『法然・一遍』(昭46・1)、『蓮如・一向一揆』(昭47・9)があり、日蓮遺文・一枚起請文・一遍上人語録・御文などが収められている。また日本古典文学全集27(昭46・8 小学館)に、正法眼蔵随聞記・歎異抄が収録され、親切な注解・訳・解説が加えられている。

②和讃(仏教歌謡) 多屋頼俊著『和讃史概説』(昭8・5 法蔵館)が三十五年後(昭43・7)に再版された。その間、和讃の専門書は刊行されなかったが、翌年(昭44・5)武石彰夫著『仏教歌謡の研究』(桜楓社)が出版された。氏の十年にわたる新資料発掘と考証研究を、第一篇和讃と仏教歌謡・第二篇梁塵秘抄・第三篇時衆和讃・第四篇宴曲として集大成し、仏教歌謡の史的位置づけを試みている。その後の研究を『仏教歌謡』(昭48・1 塙書房)にまとめ、本文資料を『中世仏教歌謡集』(上・下 昭44・11、45・10 古典文庫)〔さらに『仏教歌謡集成』(正・続 昭51・1、52・3 大東文化大学附属東洋研究所)に収録する。

③唱導・説教 菊地良一著『中世の唱導文芸』については①法語で紹介したが、それに続く研究として、関山和夫著『説教の歴史的研究』(昭48・3 法蔵館)があ

る。本書は説教が日本においてどのように展開してきたかを古代から近代に至るまで詳細に解明したもので、説教についての本格的な研究書である。氏には『話芸の系譜』(昭48・11 創元社)など、仏教芸能に関する研究もみられる。その他、永井義憲・清水有聖編『安居院唱導集』(上 昭47・3 角川書店。下は未刊)があり、金沢文庫蔵・言泉集など貴重な資料が翻刻・紹介されている。

④時衆 時衆に関する研究で注意すべきは、金井清光著『時衆文芸研究』(昭42・11 風間書房)である。本書は時衆と中世の文学・芸能の関係を明らかにするため、過去十五年間続けてきた研究をまとめた労作である。第一部論文編には「時衆文芸研究序説」をはじめ、一遍の法語や和歌、善光寺聖と語り物、平家物語・太平記と時衆などについての論文十二編が収められ、第二部資料編には「時衆文芸研究文献解説稿案」「全国主要図書館時衆文献目録」等が収録されており、時衆研究の礎となる業績である。この他、大橋俊雄の一連の研究『一遍——その行動と思想』(昭46・8 評論社)、『遊行聖』(昭46・2 大蔵出版)、『時衆の成立と展開』(昭48・6 吉川弘文館)、『踊り念仏』

(昭49・7 大蔵出版)があり、注目される。

⑤説話 昭和四十年代における説話研究は、飛躍的な進展を遂げる。研究者人口の増加のみならず、研究の多様化・拡大化が著しい。その研究内容を詳細に記すいとまはないが、主な業績を次の(a)・(b)・(c)にまとめることができる。(a)テキスト類の刊行[古典文庫『三宝絵』『閑居友』『宝物集』『私聚百因縁集』『発心集』(昭40・5・47・6)、日本古典文学大系『古今著聞集』『沙石集』『日本霊異記』(昭41・3・42・3)、貴重古典籍叢刊『神道集』『宝物集』(昭43・7、48・3)、古典資料『三國伝記』『私聚百因縁集』『日本霊異記』『十訓抄』(昭44・3・45・11)、岩波文庫『撰集抄』(昭45・1)、日本古典文学全集『今昔物語集』(一)～(三)『宇治拾遺物語』(昭46・7・49・7)、中世の文学『雑談集』『閑居友』(昭48・9・49・12)、日本思想大系『往生伝・法華験記』(昭49・9)など]。(b)辞典・索引類の刊行[『説話文学辞典』(昭44・3)、『今昔物語集文節索引』十五冊(昭41・4・49・10)、『古本説話集総索引』(昭44・4)、『閑居友本文及び総索引』(昭49・5)、増補改訂日本説話文学索引』(昭49・9)など]。(c)研究書類の刊行[古典遺産の会編『往生伝の研究』(昭43・5)、日本文学研究資料叢書『今

昔物語集』『説話文学』(昭45・3、47・11)、打聞集を読む会編『打聞集研究と本文』(昭46・8)、菊地良一著『中世説話の研究』(昭47・4)、山岸徳平著『説話文学研究』(昭47・10)、白田甚五郎・西尾光一編『日本の説話』(一)~(四)、(内中)昭48・10・49・11、石橋義秀著『仏教説話研究』(昭49・1)、守屋俊彦著『日本霊異記の研究』(昭49・5)、片寄正義著『今昔物語集研究・下』(昭49・6)、築瀬一雄著『説話文学研究』(昭49・7)、高橋眞著『中古説話文学研究序説』(昭49・11)、志村有弘著『中世説話文学研究序説』(昭49・11)など。(その他、紹介すべきものもあるが、省略する。)

要するに、四十年代から五十年代にかけて続々と研究成果が公刊されているが、それらの内、仏教文学について正面から取り組んだ研究として特に注意すべきは、菊地良一著『中世説話の研究』(昭47・4 桜楓社)である。

即ち氏は「仏教文学——直接的に宗教的な働きを意図している作品(特に仏教説話と僧伝)」を取りあげ、仏教説話の教説と唱導や、仏教説話の文学的形成、僧伝の説話的形成という未開拓の分野の研究を試みている。

前年代で紹介した岩本裕の研究は、その後も継続して

いる。『極楽と地獄』(昭40・8 三一書房)・『観音の表情』(昭43・12 淡交社)・『目連伝説と盂蘭盆』(昭43・9 法蔵館)等であるが、いずれも仏教經典を調査して、説話文学を発掘し、それがインドから中国を経て日本に流入する過程を追及するという実証的な研究である。(以上の三書を核にし、その後の研究を加えて『仏教説話の伝承と信仰』『地獄めぐりの文学』(仏教説話研究)第三・四巻 昭53・12、54・1 開明書院)に集大成された。

四、昭和五十年代の研究

昭和五十年代においては、四十代に増して仏教文学研究の多様化が進み、研究論文の数も増加している。『仏

教文学研究』は第二期第二集(昭51・4 特集・仏教説話)で中断し、翌年から雑誌「仏教文学」に切りかわり、現在第九号を数える。仏教文学会の果たす役割が大きいことはこの年代においても同様である。

仏教文学を標榜する単行本は十数冊みられるが、重要と思われる研究書・論文集等を紹介しよう。

まず、仏教文学全般にかかわる研究として、菊地良一著『古代中世日本仏教文学論』(昭51・11 桜楓社)がある。本書は序論・仏教思想の文芸的領域、第一編・因果思想の文芸的展開、第二編・悲哀感の文芸的無常への展開、第三編・文芸営為における信仰形成、第四編・道元の法語における象徴的表現より成る。つまり、文芸と宗教の接点に仏教文学が存在するという視点から、因果思想と文芸の関連、無常観と文芸との関わり、狂言綺語観と文芸の相剋などの課題を追求し、仏教文学とは何かの問いに答えようとする。氏の仏教文学研究の到達点が表示されているといえよう。

次に、仏教文学関係の論文集を取りあげる。(1)永井義憲著『日本文学と仏教文学』(昭52・3 私家版)は、仏教

文学に関する論考十編を収録したもので、前著(『日本仏教文学研究』第一・二集)を補う意味でも貴重である。(2)武石彰夫著『仏教文学の周辺』(昭52・9 大東文化大学附属東洋研究所)は、前著(『仏教文学論考』)以後の仏教文学関係論文十数編を収める。(1)(2)ともに実証的な研究といえよう。(3)共同研究として注目すべきは大正大学国文学会編『文学と仏教』(昭55・11 教育出版センター)である。〈迷いと悟り〉というテーマの特集で、古代から近代までの論文十四編を収める。(4)浜千代清・渡辺貞麿編『日本文学と仏教思想』(昭59・5 世界思想社)は、文学と仏教は背反するのだろうかという問いから出発し、④因果思想・法華経信仰・浄土信仰等を説話を通して考察する(第一章・三章)、⑤平家物語・序章の解釈を中心にし、仏教的無常観がこの作品を支えている(第四章)、⑥西行・長明らの文学作品は、仏教と文学を鋭く凝視した結果、自覚と超克により生み出されたのである(第五章)など、仏教と文学について重要な問題提起と解釈を示す。

その他、啓蒙的・入門的な内容のものであるが、(1)五来重編『仏教文学』(昭52・7 角川書店)、(2)今成元昭編

『宗教と文学』（昭52・4 秋山書店）、(3)同編『仏教文学の世界』（昭53・1 日本放送出版協会）、(4)紀野一義・三木紀人編『仏教文学の古典 上・下』（昭54・5、55・3 有斐閣）、(5)間中富士子著『仏教文学入門』（昭57・6 世界聖典刊行協会）などがある。それぞれ仏教文学に対する見方や研究法は異なるが、参考になる点が少なくない。

なお、研究書ではないが、武石彰夫・菅沼晃編『仏教文学辞典』（昭55・6 東京堂出版）が最初の仏教文学関係の辞典として注目される。

個別的研究①法語 法語文学全般に関わる研究として、小林智昭著『法語文学の世界』（昭50・3 笠間書院）がある。第一章「法語文学の性格」で法語の概念や文学性等について明治から昭和の研究を整理して詳述、第二章「仏教思想と文学」で法語の宗教性・文学性等について考察、第三・七章で法然・親鸞・道元・日蓮・一遍の法語について文学的立場から論究する。本書は法語文学についての体系的な著述であり、法語研究の礎となる業績である。

法語文学の研究書ではないが、永積安明著『中世文学

の可能性』（昭52・6 岩波書店）のII章に「法語における文学の成立」「仮名法語について」の論文の他、方丈記・徒然草に関する論考があり、法語文学の本質に関わる問題を追求している。

入門的性格をもつが、前記の五来重編『仏教文学』は、歎異抄の他、法然・一遍・道元・日蓮等の法語類を抜粋し、解説・注釈をつけ、巻末に法語に関する論考と参考文献とを付す。

その他、伊藤博之校注『歎異抄・三帖和讃』（昭56・10 新潮社）は、両書の他、末燈鈔・恵信尼文書を収録する。頭注・傍注を施し、巻末に詳細な解説（親鸞の思想、その生涯と著作について）をつける。「氏は長年、歎異抄等の論文を『文学』『日本文学』などの研究雑誌に数多く発表され、法語研究の進展に寄与された。」

②唱導・説教、仏教芸能 前年代に大著『説教の歴史的研究』を公刊した関山和夫は、その後も精力的に研究を続け、『説教の歴史』（昭53・11 岩波書店）・『仏教と民間芸能』（昭57・12 白水社）等を出版する。前著は節談説教の型・説教話芸の源流・説教と大衆芸能・埋もれた

芸能という題で、古代から近代までの説教について詳述する。後著は声明・和讃・念仏踊り・祭文・説経節・説教・絵解き等、仏教芸能全般について資料を調査し、解説を加える。氏独自のすぐれた研究といえよう。

次に注意すべきは、榊泰純著『日本仏教芸能史研究』（昭55・2 風間書房）である。氏が約二十年間研究してきた仏教芸能に関する論考を集成したもので、第一部・信仰篇における芸能や和歌に関する諸論文は未開拓の分野の研究が多く、第二部の妙音院師長の日本音楽史上の位置づけをした論や長明の音楽と信仰についての論、第三部・音楽篇の六時礼讃についての研究や夜行念仏に関する資料報告など、類をみない貴重な業績である。

昭和五十五年に絵解き研究会が発足し、隔月に研究例会が開催され、会誌「絵解き研究」も三冊刊行されている。会員の川口久雄・林雅彦は、それぞれ『絵解きの世界』（昭56・4 明治書院）・『日本の絵解き』（昭57・2 三弥井書店）を公刊した。前著は、I我が国における絵解き、II我が国における題画文学、III漢風文化と平安文学、IV国語散文の流れと物語の絵解きから成る。敦煌変文と

題画が日本の文学と絵解きにどのような影をうつしているかという日中比較文化論であるが、随所に資料を博捜し、氏独自の新見がみられる。後著は、資料篇・研究篇（付、参考文献目録）から成る。資料篇は立山手引草など絵解き台本三種の翻刻が中心で、研究篇は「絵解きの内容・芸態及び歴史」を総論とし、熊野比丘尼や立山曼荼羅などの絵解きに関する各論を収録する。フィールドワークに基づく着実な業績である（増補版 昭59・6）。なお同氏らにより『絵解き台本集』（昭58・11 三弥井書店）、南博らにより『えとく紙芝居・のぞきからくり・写し絵の世界』（昭57・6 白水社）が出版されるなど、絵解きに対する関心が高まっている。

③時衆 金井清光は前著『時衆文芸研究』の後、『時衆と中世文学』（昭50・9 東京美術）を公刊した。前半は論文編で、時衆と中世の文学・芸能に関する論文十一編と書評七編を収録し、後半は時衆研究文献解説稿案で（前著『資料編』解説稿案の後の十年間の研究文献を解説したものであり）、著者の本領が窺える貴重な業績である。また氏は『一遍と時衆教団』（昭50・3 角川書店）を公刊。

本書は一遍の生涯と宗教・真教の時衆教団形成・遊行派の成立と展開・時衆十二派・六十万人知識と遊行派より成る。文献資料を博搜した中世の時衆教団についての実証的な研究である。その他、栗田勇・大橋俊雄・浅山田祥らの研究があるが省略する。

④説話 昭和五十年代における説話研究は前年代以上に多様化し、かつ深化する。その研究内容について紹介する余裕はない。前年代同様(a)・(b)・(c)の三つに分けて、主たる業績を列挙する。(a)テキスト類の刊行『角川文庫』『発心集』『古今著聞集』(昭50・4・53・7)、日本古典文学全集『日本霊異記』『今昔物語集』(昭50・11・51・3)、古典文庫『十訓抄』『撰集抄』『三國伝記』(昭51・4・58・3)、新潮日本古典集成『方丈記・発心集』『今昔物語集』『古今著聞集』(昭51・10・59・6)、中世の文学『三國伝記』(昭51・12・57・7)、講談社学術文庫『日本霊異記』『今昔物語集』(昭53・12・59・12)、笠間叢書『撰集抄・校本篇』『三宝絵集成』(54・12・55・6)など。(b)索引類の刊行『宇治拾遺物語総索引』(昭50・2)、『法華百座聞書抄総索引』(昭50・3)、『今昔物語集文節索引』十六冊(昭50・8・56・8)、『日本霊異記漢字索引』(昭50・11)、『今昔物語集人名人物総索引』(昭51・9)、『十訓抄人名人物総索引』(昭52・12)、『沙石集総索引』(昭54・3)、『打開集の研究と総索引』(昭55・1)、『今昔物語目立語索引』(昭57・2)、『十訓抄・本文と索引』(昭57・12)、『今昔物語集漢字索引』(昭59・1)など。(c)研究書類の刊行『春田宣著『中世説話文学論序説』(昭50・4)、築瀬一雄著『発心集研究』(昭50・5)、白田甚五郎・西尾光一編『日本の説話』(田・別巻(昭50・6、51・10)、志田諄一著『日本霊異記と社会』(昭50・8)、八木教著『日本霊異記の研究』(昭51・1)、志村有弘著『往生伝研究序説』(昭52・3)、山路平四郎・国東文麿編『日本霊異記』(昭52・12)、守屋俊彦著『続日本霊異記の研究』(昭53・11)、安藤直太郎著『説話と俳諧の研究』(昭54・3)、北海道説話文学研究会編『中世説話の世界』(昭54・4)、渥美かをる著『軍記物語と説話』(昭54・5)、西尾光一教授定年記念論集刊行会編『論纂説話と説話文学』(昭54・6)、辻英子著『日本感霊録の研究』(昭56・3)、馬淵和夫博士退官記念論集刊行会編『説話文学論集』(昭56・7)、黒部通善著『説話の生成と変容について』(昭57・3)、志村有弘著『説話文学の構想と伝承』(昭57・5)、『今昔物語集注文の研究』(昭57・5)、日本霊異記研

引』(昭50・11)、『今昔物語集人名人物総索引』(昭51・9)、『十訓抄人名人物総索引』(昭52・12)、『沙石集総索引』(昭54・3)、『打開集の研究と総索引』(昭55・1)、『今昔物語目立語索引』(昭57・2)、『十訓抄・本文と索引』(昭57・12)、『今昔物語集漢字索引』(昭59・1)など。(c)研究書類の刊行『春田宣著『中世説話文学論序説』(昭50・4)、築瀬一雄著『発心集研究』(昭50・5)、白田甚五郎・西尾光一編『日本の説話』(田・別巻(昭50・6、51・10)、志田諄一著『日本霊異記と社会』(昭50・8)、八木教著『日本霊異記の研究』(昭51・1)、志村有弘著『往生伝研究序説』(昭52・3)、山路平四郎・国東文麿編『日本霊異記』(昭52・12)、守屋俊彦著『続日本霊異記の研究』(昭53・11)、安藤直太郎著『説話と俳諧の研究』(昭54・3)、北海道説話文学研究会編『中世説話の世界』(昭54・4)、渥美かをる著『軍記物語と説話』(昭54・5)、西尾光一教授定年記念論集刊行会編『論纂説話と説話文学』(昭54・6)、辻英子著『日本感霊録の研究』(昭56・3)、馬淵和夫博士退官記念論集刊行会編『説話文学論集』(昭56・7)、黒部通善著『説話の生成と変容について』(昭57・3)、志村有弘著『説話文学の構想と伝承』(昭57・5)、『今昔物語集注文の研究』(昭57・5)、日本霊異記研

究会編『日本霊異記の世界』(昭57・6)、原田行造著『中世説話文学の研究』(昭57・10、57・11)、池上洵一著『今昔物語集の世界』(昭58・8)、原田行造著『日本霊異記の新研究』(昭59・6)、青山克弥『鴨長明の説話世界』(昭59・10)など。

五十年代においては、右記の如く陸続と成果が刊行され、研究の多様化・拡大はとどまるところを知らない。そのような研究状況の中で(右記にその名はあげていないが)、注意すべきは仏教学者・石田瑞麿の『中世文学と仏教の交渉』(昭50・7春秋社)である。氏は仏教学の側から中世文学(特に仏教説話)を綿密に考察し、中世文学に仏教がいかに作用しているかを説く。また歴史学の立場からの研究として、目崎徳衛著『出家遁世』(昭51・6中央公論社)、『西行の思想的的研究』(昭53・12吉川弘文館)、平林盛得著『聖と説話の史的的研究』(昭56・7吉川弘文館)など、参照すべきものも少なくない。

※①④に取り上げた研究の他、蔭木英雄著『五山詩史の研究』(昭52・2笠間書院)や石原清志著『釈教歌の研究』(昭55・8同朋舎)など紹介すべき業績が多く見られるが、紙幅の都合で割愛せざるを得ない。

五、むすび

——研究動向のまとめと、今後の研究課題

以上、大雑把ではあるが、二〇四において、過去およそ三十年間の仏教文学研究の動向を十年ごとに区切って概括してみた。次にその総まとめと、今後の研究課題について私見を申し添えておきたい。

昭和三十年代以降、仏教文学研究は大きな進展を遂げ、年を追うごとにその研究は活発になり、将来ますます盛んになることと思われる。前述の如く、その進展に大きな役割を果たしたのは仏教文学研究会(現・仏教文学会)である。特に『仏教文学研究』(全十四冊)が刊行された時期(昭38・1・51・4)は、会員であり、論文集の執筆者でもある永井義憲・菊地良一・小林智昭・武石彰夫・今成元昭・岩本裕らが次々と業績をあげ活躍した(その研究内容については前述の通りである)。論文集十四冊には約百五十編の仏教文学関係論文が収録されているが、それら論文の中で、文学作品に見られる仏教思想や教理をめぐりだす、或いは分類・整理する研究が目立って多

い。三十年代から四十年代にかけての研究の特色といってもよい。

四十年代から五十年代は、研究が多様化し、本文の提供・新資料の発掘が盛んに行われ、その研究は拡散し、また特殊化の傾向をたどっていく。研究者人口は増え、研究書や論文の数は飛躍的に増加しているが、本格的・本質的な研究が多いとはいえない。

右のような状況を踏まえて、今後、研究すべき課題を思いつくままに記す。

(イ)近年、テキスト類や新出資料が数多く出版、報告されるが、それらについて十分な解釈・吟味が行われていない。現在発表されている資料についてさらに研究を進める必要がある。

(ロ)国文学に見られる仏教思想・教理などを抽出する研究が三十年代から四十年代にかけて盛んに行われ、現在も続けられているが、一つの作品についてのその研究がどのような意味をもつか、或いはその作品の背景をなす時代の仏教思想とどう関わるのかなど、もっと広い視野からの研究が望まれる。

(ハ) (ロ)に記した) 仏教思想・教理面の研究は多く行われているが、それに対し、文学(文芸)と仏教の関わりについての考察、或いは仏教がいかに文学として実現されているかというような(文学の立場からいえば)本質に関わる研究がなされなくてはならない。

(ニ)現在までの研究は、いわゆる書かれた仏教文学の研究が中心であるが、それと同時に、語られた仏教文学(唱導・説教・絵解きなど)についてもっと研究される必要がある。当然、民俗学・仏教史学・美術史等の隣接分野からのアプローチが重要になってくる。「仏教文学研究」は、仏教そのものを研究対象とするものではないが、前記の隣接分野の視座や研究方法を参考にすると同時に、仏教、殊に日本仏教について深く認識する必要がある。]

その他にもいろいろなことが考えられるが、今後、拡散・特殊化された研究を学際的観点に立ち、深化、さらに普遍化させていくことが望まれる。場合によっては国文学内外のグループによる共同研究も必要となろう。

〔補注(一)〕『仏教文学』の概念規定は、研究者により、まちまちで一定しないが、国文学の分野では、一般に『仏教の

影響を受けた文学作品』と広義に解釈されているといっている。〔因みに「仏教文学学会則」(第二条)に「本会は仏教の文学・芸術 および一般文学・芸術の中に現われた仏教の研究を目的とする。』(波線、筆者)とあり、仏教文学を広義に規定している。〕

なお、仏教文学の概念規定を問題にした論文は数多く見られるが、『仏教文学研究』第十二集(昭48・7 法蔵館)で「仏教文学とは何か」を特集し、多屋頼俊・久松潜一・小林智昭・川口久雄・井手恒雄・阿部秋生・藤田清・菊地良一・目加田さくを・渥美かをる・嶺光雄・榊泰純・広田徹・岩瀬法雲が、それぞれの立場から仏教文学を定義づけている。(その他、仏教文学の概念規定に関する論文は、拙稿「仏教文学研究論文目録稿」(『仏教文学』第四号 昭55・3)、或いは「仏教文学研究論文主要目録」(『国文学・解釈と鑑賞』第四八巻一五号 昭58・12)に指摘しているのを、参照いただきたい。]

〔補注(2)〕最近、絵解き研究会の会員諸氏による論文集『一冊の講座・絵解き』(日本の古典文学3)(昭60・9 有精堂)が刊行された。本書には「絵解きの歴史の変遷」(関山和夫)・「中世説話文学と絵解き」(小峯和明)・「変相図と絵解き」(川口久雄)のほか、絵解きと庶民浄土教・熊野比丘尼・縁起絵巻・屏風歌・地獄絵・九想図・善光寺如来絵伝・聖徳太子絵伝・弘法大師絵伝・法然上人絵伝・親鸞上人絵伝・玉虫厨子絵・矢田地蔵縁起・菊宣など二十四編の論考、および「絵解き研究文献目録」(林雅彦)が収録されており、絵解きについて、多角的に調査・研究が行われている。

* * *

〔補記〕小稿を書き上げた時期に、永井義憲著『日本仏教文学研究・第三集』(昭60・7 新泉社)を手にした。氏の前者『日本仏教文学研究・第一・二集』に続くもので、見のがすことができないと思われるので、簡単に紹介しておく。第一編「文学と仏教」、第二編「日記・物語と仏教」、第三編「和歌・歌謡と仏教」、第四編「唱導の文芸」、第五編「説話と仏教」、第六編「資料紹介と翻刻」より構成され、既発表論文等四十八編を収録する。各編とも示唆に富む実証的な研究であるが、特に「日本文学と仏教文学」「仏教思想と国文学」など、文学と仏教の関係を考察した論文四編を収める第一編や、唱導・説話についての論考二十一編を収める第四・五編等、著者のユニークな、すぐれた研究といえよう。

(いしばしぎしゅう・大谷大学助教授)